全教幼稚園部ニュース

またあした

2017 年 9 月
全日本教職員組合（全教）幼稚園部

みなさん、お元気ですか。
秋の気配を感じるようになり、子どもたちは、体を動かして遊ぶ心地よさを感じているのではないでしょうか。
久しぶりの「幼稚園部ニュース」をお届けします。２０１７年度の全教幼稚園部常任委員の紹介をさせていただきます。力を合わせて頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

２０１７年度　全教幼稚園部　常任委員

部長	丸田　純子（京教組）	／	副部長	守行　みち子（大教組）
常任委員	櫻井　真由美（都教組）			
常任委員	久保　登希子（私教連）			
担当中執	宮下　直樹	／	担当書記	井深　愛

幼稚園部総会と夏季教育研究集会を行いました

７月２２日～２３日に、京都の聖護院御殿荘で開催しました。各地から集まる機会に、いろいろな知識を得たり情報交換をしたりすることができ、充実した２日間となりました。

特別支援、預かり保育　全国の状況を交流

～２０１７年度　幼稚園部総会開催～

総会では、2016 年度のとりくみと 2017 年度の運動方針案を提案した後、各県交流をしました。
京都は 2015 年度より全園で預かり保育を 18 時まで行なっています。長期休業中は支援の必要な子に介助の先生がついていないため、担任がつかざるを得ない状況です。長時間労働の問題では残業の報告を出すとき、制限時間を超えないように調整しています。
東京では保護者とともに幼稚園をなくさない、保育料を値上げしない、公立幼稚園を守るための活動を行なっています。特別支援の必要な幼児が多く、介助員がついてくれるようになりました。
大阪では新任がパワハラ問題をきっかけに組合に加入しました。権限委譲で役所と同じシステムになり、出張や休暇の手続きのためのパソコンの操作に時間がかかって教員の負担になっています。また、地域の合意がとれたところから廃園になることがきまっており、2019 年度に民間になる幼稚園があります。
私教連では、働いている母親が増えてきて２歳児保育を受け入れる園もあります。認定こども園に移行する園が増えてきています。補助金が増えてきていますが、教員の給料はあがりません。賃金が低いため職員が不足している状況です。

仲間づくり・学級づくりを学ぶ　～全教幼稚園部　夏季教育研究集会～

講演１

「子どものための支援ではない保護者支援から」
～「保護者」そのものを支援する必要性～
吉葉　研司氏（名古屋学芸大学　ヒューマンケア学部　子どもケア学科教授）

＜保護者自身も悩みをもっている＞

子どものための保護者支援には、「子どものために頑張るのよ」というメッセージが隠されている。保護者が今求めているのは、保護者のための保護者支援である。保護者も「生きづらさ」をもつ１人の人なのである。

＜２つの矛盾のはざまで、母親たちは悩んでいる＞

「自己としてのアイデンティティーをもつこと」と「子どもを守るよい母親であれ」という母親としての、また、「子どもはのびのびと育てるもの」と「子ども時代のしつけや教育が一生を決める」という子育てにおける逆方向の求めに、母親は苦しんでいる。

＜自己責任で完璧な子どもを育てることが求められる＞

今回の幼稚園教育要領改訂では、「のびのび」も「勉強」も「生活態度」も「主体性」もすべてできる子どもを求めている。

＜母親は、素の自分でいられる場を求めている＞

子育てに無関係な人は子どもをかわいいと思うが、子どもとのかかわりが多いと、そう思えなくなる。母親の立場以外での自分が認められる場が必要である。

＜幼稚園で必要な保護者支援＞

保護者のことを受けとめ、そして、子どもの成長を保護者と分かち合い、子どもの育ちをつくったのは保護者である、と伝えることから始める。

講演２

「特別支援教育について」
星山　麻木氏（明星大学　教育学部　教育学科教授）

＜まずは大人を助けたい＞

多摩ニュータウンで小学校の学級崩壊に出合った。教室でドッジボールをする子どもがいても、担任は手を打つことができずに、見ない振りをして授業をしていた。そこで、大人を助けたいと思うようになった。

＜発達障害のことを学ぶ場を＞

発達障害のことを知らない人が教員にも保護者にも多く、講演会を始めた。我が子を心配して病院に行く母親でも、マイナスイメージのタイトルがつくと参加しにくいと聞き、講演会にマイナスのキーワードは使うのをやめた。

その後、学びたい保護者が増え、現在は「サポーター講座」（子どものサポーターになりたい人）を年間２０回合計４０時間で開催している。

＜診断より、よい支援が必要＞

北欧は約１７％が支援が必要な子どもだといわれている。日本は診断がついてない子どもは支援に入れない。診断より大切なのは、よい支援である。具体的な支援方法を学ぶことで、親も子も早く安心することができる。

＜誰もが多様であることを受け入れる＞

特別支援教育は、本当は特別ではない。自分と異なる人間を深く理解すること、大切にすることが必要である。自分を知れば知るほど、誰もが助けたり、助けられたりするものだと考えられるようになる。

＜安心できるように＞

就学の際には、安心が何よりなので、安心できる先生を見つけられるようにすることである。幼稚園の時はありのままの姿を支える。

遊びほど素敵な学習はない。大事なことは目に見えないところにある。

レポート報告１　「A児の１年の姿を通して」　横井　真由　（私教連）

＜入園の頃の姿から＞

３歳児のA児は、思うようにならないと気持ちの切り替えが難しかった。また、意思表示はなく、どうしたいのか分からないことが多かった。

⇨

＜運動会の取組の中で＞

自分のタイミングで取り組むことはあるが、みんなでする時にはやりたがらなかった。担任は、表情でのやり取りの中で、走ることだけするという意志を受け取った。

⇨

＜運動会を終えて＞

思いの出し方が分かってきたからなのか、不安を強く表現するようになった。弁当を食べなかったが、教師が隣にいることで食べられることが分かり、保護者と支援について話し合った。A児にとって、思いを分かってくれる大人が隣にいることが安心感になった。

＜三学期になって＞

不安があると高い所に登るようになった。大人が来ると嬉しそうにするので、登らなくても大人が来てくれることを伝えた。

⇨

＜１年を過ごして＞

意思表示がなかったA児だったが、教師が気持ちに寄り添うことで、反応を示すようになった。子どもの心を探る難しさと丁寧にかかわる大切さを感じた。

レポートのまとめ

〇子どものことを決めつけた見方ではなく、子どもに誠実な保育をしている。

〇A児が運動会の種目で野外劇だけに進んで参加したのは、結果が分かり意識する年齢になっているので、何をしても認められる正解がないプログラムだったからという可能性がある。

〇子どもの様子が気にかかっても、どのタイミングで保護者と共有するのかが難しい。具体的な事例と共に、保護者との関係性ができた中で進めていく。

レポート報告２　「特別支援コーディネーターとして」　櫻井　真由美　（都教組）

昨年度から担任を外れ特別支援担当になって２年目。本年度は異動して新たな職場でのスタートとなりました。特別支援の専任として経験したことの中から、感じたこと思ったことについての報告です。

★特別支援コーディネーターの役割は、介助員と管理職や担任をつなぐことである。

＜Ｔ児と過ごした昨年度の１年間＞

Ｔ児は４歳児で生活全般に支援が必要だったが、「〇〇貸してください」などのやり取りを通して、人とかかわる機会をつくってきた。三学期頃から、学級の一員という感覚が生まれてきた。他児には「ゆっくり大きくなってきている」とＴ児のことを知らせていた。

＜昨年度に感じたこと＞

特別支援教育を進めるにあたっては、担任と介助員、特別支援コーディネーターが、子どものためにコミュニケーションをはかって進めていくことが大切である。

＜特別支援コーディネーターフリー教諭の役割＞

今年度は、フリー教員として１２人の介助員がいる幼稚園に在籍し、配置状況の把握や、情報共有ができるように担任と介助員の仲立ちなどをしている。介助員のかかわり方に関して担任の考え方は様々なので、支援をどの程度するのか判断するのには難しさがある。

＜昨年度と比べて＞

初めての職種なので、園内での立ち位置が難しい。支援を必要とする幼児の課題や担任と介助員の打ち合わせ内容を、週案と日々の記録を通して把握している。担任との打ち合わせの意図に沿うように意識しながら、経験をもとに対応の仕方を介助員に提案している。

レポートのまとめ

〇支援の必要な子どもの育ちのためにすることと、クラス全体の育ちのためにすることとの折り合いをつけるには、話し合いをもって情報共有するしかないのだろう。

〇特別支援教育はチーム保育である。担任１人でできるものではない。子どものことをよく知り、園内で個の情報共有をすることが大切である。

夜の交流会

今年も持ち寄った実技の交流をしました！

それぞれの職場が忙しい中で、参加してくださった皆さん、ありがとうございました。次回の学習会は春に予定しています。次回は、みなさん是非ご参加ください。

全教幼稚園部では、冬の文科省交渉に向けて、特別支援教育の実態調査アンケートに取り組んでいます。現状を伝え、教育条件の改善を訴えたいと思いますので、どうぞご協力ください。

おしらせ　２０１８年度の全教幼稚園部夏季教研は２０１８年７月２１日～２２日に京都御殿荘で開催します。